

馬氏家範
卷之二
目錄

しまがとしお ぜんしゅうたい かん
島尾敏雄全集 第14巻

一九八二年七月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二丁目二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六一二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1982 Toshio Shimao

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で復写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたしません

島尾敏雄全集

第14卷

晶文社

ブックデザイン
平野甲賀

島尾敏雄全集第14巻・目次

丹羽正光氏への返事	13
宮本常一著「日本の離島」	20
不確かな記憶の中で	22
南日本新聞・家庭小説選評(昭和三十六年度)	27
おめでとう1961年	28
フェリーニのおののき	29
芸術選奨を受けて	31
たより	34
安岡伸好著「遠い海」	35
文壇遠望記	36
石川さんの方	44
受賞のあとの今	48

ある日私は	50
私の八月十五日	51
作家の手紙	54
週刊新潮掲示板	54
象徴的な桜島の存在	55
七年目の東京	58
南日本新聞・家庭小説選評(昭和三十七年度)	61
鬱憤譚	63
日記	64
沈復の「浮生六記」	70
わが小説	73
私の周辺	75
読みちがえ又はきまじめな注釈	76
「島へ」後記	79
母の舌	80
「非超現実主義的な超現実主義の覚え書」後書	82

アンケート・批評家に望むへのこたえ	83
次の白い頁に	84
大牟羅良編「北上山系に生存す」	86
過ぎ行きの素顔	88
死をおそれて	90
幼い頃	98
南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和三十八年度)	100
思い出につながる幼少時代のたべもの	101
アンケート・新「北九州」市に望むへのこたえ	102
キャラメル事件	102
私の受験時代	105
長篇の愉しみ	107
来年こそは……	110
南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和三十九年度)	110
二つの根っここのあいだで	111
長谷川四郎著「目下旧聞篇」	113

「出発は遂に訪れず」後記

図書館の秘儀

熊本の縁

母を語る

アンケート・作家から見た読者へのこたえ

アンケート・作家への手紙のこたえ

小説への接近

私の中の神戸

私の文学遍歴

アンケート・感銘を受けた本へのこたえ

猫と妻

消された先祖

はじめての経験

繋りを待ちつつ

交遊抄

書物と古本屋と図書館と

ヘルマフロデイトスの悲しみ

南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和四十年度)

旅路はいつ終わる

いやな先生

「地方文学」ということに就いて

書庫に憑かれて

「徳之島航海記」作成の経緯

小高根二郎著「詩人——その生涯と運命」

「田中英光全集」第七巻を読んで

震洋隊の旧部下たち

二十年目の八月十五日

或る部下の事

一冊の本

教訓的な感想

「日のちぢまり」後記

南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和四十一年度)

	ブルースト知らず	218
	なつかしいおかしさ	220
	シンポジウム発言草稿	221
	このごろ	223
	文芸時評	224
	一病息災	236
	「私の文学遍歴」後書	238
	私の人生を決めた一冊の本	238
	「賈学生」が書けたころ	240
	名著発掘	243
	「島にて」後書	245
	むかしの部下	246
	八月十五日	249
	私の近況	252
	詩人の存在	254
	私のおすすめしたい本	256

長谷川四郎著「模範兵隊小説集」

私の感銘した本

南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和四十二年度)

どうして小説を私は書くか

子どもらへのためらい

第一期魚雷艇学生

上野英信著「地の庭の笑い話」

特攻隊員の生活

「幼年記」解説

私の内部に残る断片

南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和四十三年度)

人生の本

伊東静雄との通交

詩人たち

「日を繋げて」後記

君仙子先生の句集に寄せて

324 323 320 300 299 298 292 287 275 271 268 267 261 260 259 257

アメリカ便り

アメリカを旅行して

アメリカ見聞抄

アメリカの離島

サン・ファン・アンティグオにて

アメリカ旅行の印象

モロカイ島カラウパパ

ニエポカラヌフ修道院

ソ連とポーランドの教会

アルメニア、ポーランド紀行

モスクワにて

モスクワ文学博物館

ポーランドの聖母の騎士修道院をたずねて

ニュー・ヨークの日本人

日本語のワルシャワ方言

モスクワだより

文学エッセイⅡ

1960—1968

丹羽正光氏への返事——文学と贖罪云々の事

「作家」五月号に掲載された私あてのお手紙を拝見しました。私はいま手もとに、昨年六月七日と八日に下書きしたあなたへの返事をもっております。それを発表しようと考えながら、一年近くも発送する日をえらびかねておりました。そこにこんどの三度目のあなたの公開書状をいただきましたので、まずそれを何度もくりかえして読みました。そしてその要旨をつぎのようにうけとりました。

おまえのこのごろの小説は、贖罪行為のつもりなのではなからうか？ と考えていたが、そうは思わないことにして、それは「人間の切符」を買うための「一つの法」を、文学を通して探ろうとしているのではないか。その場合、モラルにかなった行為として自分を被告になぞらえ自作自演の審きを一生のテーマにしようとしているのではないか。しかしそのモラルだけが唯一のものとは限らないだけでなく、それはおまえの本来のテーマから逸れているのではないか——

あなたのお手紙は好意をかくさない大胆な言葉に満ちていますが、それだけでなく槍をつきつけるべきところもはつきりおさえてあり、私の小説のおちいっている状況がどんな容貌をしているかについて教えられるところが多くありました。

おそらく私は目覚めなければならぬプログラムをもつことが予感されますが、現に私がその中に

はいつている過程があつて、歩みは遅く、そのあいだ、いろいろ考えが並んでいる状態です。

で、とにかく、下書きして置いた返事を、いま思ひきつて手もとを放します。三度目のあなたのお手紙への返事として、言葉そのものに対応するかたちの返事にはなりません、でも文学は贖罪行為になるか？ という否定的な問いかけは、あなたが撤回なさったにもかかわらず根本のところ、なおわだかまっていると思取られますので、それについての私の返事として、まにあうのではないかと思います。

結論をいいますと、すこし食いちがつたところという気もしますが、あなたの問いかけに応じた返事として、文学だけを人間の全体のいとなみから切りはなしては考えられないことを前提とすれば（そして私はそう思うのですが）文学もまた、くりかえしこころみられる罪のあがないの行為（「贖罪」という言葉はあえて避けて）とみてもよいのではないかという答えを、ひとまず出して置きます。しかしそれはあまりに視点を広げすぎた言い方だと言われれば、それには逆らいません。目と目、歯と歯というところで、罪のあがないのための文学などというはなしであれば、私もはじめから、その二つを結びつけては考えないと思えますから。

つぎに下書きしていた返事を筆写してお送りいたします。

——私はいままで、あなたから二つの公開された話しかけを受け取りました。はじめの一通は、「群像」三十二年二月号の「読者月評欄」でみた、『治療』の島尾敏雄さんに」という文章でした。どこか遠いさびしい野原で、私の方に、若者がたったひとりで、両足をふんばり大きすぎる旗をふりまわしながらフリーフレーと声援しているすがたが、焼付きました。そのころ、私の生活から病的な

要素がすっかりはまだとれていなかったので、誰かが自分の方を向いてくれるだけで、大きな安らぎが与えられました。だから「群像」でみつけたあなたの文章は私を鼓舞しました。これはどうしてもその人になにかの方法で伝えなければならぬと考えました。しかし不安定な日日に追いかけられて時は過ぎ去りました。私はその前後に東京をはなれ、鹿児島島の南のはなれ島に住むようになり、かつてのように仲間と話し合うようなことも全くなく、七島灘の荒海をわたってここまで送られてくるいくつかの同人雑誌を積重ねてはくずし、くずしてはまた積重ねていますが、或る日、その一つの「作家」に、「針尾島の異邦人」と題された一篇の小説をみつけたのです。

針尾島はこのあいだの戦争の末期に海軍の海兵団が急ごしらえされたところと記憶していますが、実は私もそこに一箇月ばかり仮住まいをしたことがあります。第十八震洋隊とよばれた水上兵器の部隊に属していて、前線基地に出るまえの待機場所だったので。瀬戸を埋めたてばかりのただ広い練兵場があって、その上を何人かが隊伍をくんで駆けあしをすると、とけてきた昼さがりの池の水の上でスケート遊びをするときのように、たよりなくゆれ動く感触が印象的でした。また島の反対側の西彼杵^{ツギ}半島とのあいだの伊ノ浦瀬戸は、潮の干満の交替時には猛烈な激流と渦をまきおこして、さまざまの景観となりますが、その細長い瀬戸を小さな五米ばかりの震洋艇で抜けきったときのことなどが忘れられず、針尾島という名のひびきが他人ごとでないように、思わずその作品を読みました。私はそこに、ういういしいエスプリを読みとり、ほっとしました。そしてその作者の名前をどっかで一度見たことに気がつき、重ねられた同人雑誌をひっくりかえしたり切りぬきをしらべたりして、それが「群像」で呼びかけをしている人と同じであることが分かりました。それがあなただったので。